

平成 30 年 6 月 19 日現在

機関番号：33919

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2017

課題番号：26370716

研究課題名(和文) タスク基盤の情報交換が生み出す言語能力創発の契機と学習者の発達軌跡

研究課題名(英文) The momenta for second language learning in task-based peer interaction and trajectories of learner development

研究代表者

松村 昌紀 (Matsumura, Masanori)

名城大学・理工学部・教授

研究者番号：60275112

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,000,000円

研究成果の概要(和文)：日本語を母語とする英語学習者がペアで情報交換型のタスクに取り組んだ際、推論の働きや発話の多機能性など自然なコミュニケーションの特質が反映されたやり取りが生まれ、協働的、共感的、支援的な相互作用が第二言語の発達を促すうえで有効であることを示した。同タイプの異なるタスクへの取り組みではそれぞれに固有の相互作用上の特徴が現れ、学習者の内省的な気づきとその発達軌跡に複雑な影響を与えることも明らかになった。第二言語指導の指針となり得るタスク特性と変数の枠組みの構築にも至った。

研究成果の概要(英文)：This study revealed that the interaction between Japanese learners of English carrying out information-exchanging tasks manifested such features of natural, spontaneous communication as the multifunctionality of an utterance and intention reading by the participants, which in turn generate collaborative discourses characterized by mutual assistance. At the same time, individual information-exchanging tasks gave rise to different interactional features, thus having their unique roles in facilitating second language development. On a longer time scale, retrospection by the learners on their own task-based production affected their subsequent performance in complex manners. On the practical side, an integrative framework has been developed for the task and task implementational variables.

研究分野：第二言語習得

キーワード：タスク 相互作用 第二言語発達

1. 研究開始当初の背景

言語教育に用いられる目標指向的なタスクに関する研究は広範に行われてきたが、次のような問題が未解明のまま残されていた。第一に、課題の種類や活動条件によって学習者の言語使用がどのように変化するかについては研究が蓄積されてきた一方、やり取りのどのような側面が実際に第二言語発達の契機となり、学習者の進歩を促すのかについては十分な関心が持たれてきたわけではなかった。発達の問題に関しては、特に情報交換型のタスクへの取り組みで見られる語やフレーズを単位とした断片的な発話の言語習得上の意味に疑問を投げかける研究者も存在し、一部には内容の浅薄さという面でもそうした課題の教育的価値への懐疑があった。

そうした中、学習者のタスクへの取り組みの中に言語形式への注意を促す言語関連エピソード (the Language Related Episodes) や足場組みなどを含む支援 (assistance) がどのように生じるといったことに目を向ける研究者も存在したが、そこに豊かな研究の蓄積があったわけではない。また、当時提案されていたタスクの複雑さや変数についてのモデルは必ずしも実践のための指針を与えてくれるものではなかったため、合理的な根拠を持ち、言語教育の指針となり得る新たな統合的枠組みを構築し、提示する必要があった。

2. 研究の目的

上述のような背景をふまえ、次の事項の解明を本研究の目的とした。

- (1) 情報交換型タスクに取り組む学習者の間のやり取りに、第二言語能力の発生と発達の契機となるどのような相互作用上の特徴が見られるのかを明らかにすること
- (2) それらの特徴は異なる性格を持つ個々の情報交換型タスクで違った現れ方をするのか、そうであるなら具体的にどのように異なるのかを特定すること
- (3) タスクへの取り組みで見られる相互作用上の特徴と学習者による気づきが経時的に学習者言語の変容にどのように関連するのかを示すこと
- (4) タスクのタイプならびに種々の特性と変数に関する理論化を進め、第二言語教育においてタスクの選択や配列、コース設計にの指針となり得る一定の枠組みを構築すること

言語指導におけるタスクの用い方をめぐっては、世界的にも、日本国内においても異なった考え方が存在する。タスクを指導構想の軸とする、いわゆるタスク基盤型 (task-based) の指導に対しては、技能獲得理論に基づいて「意味に焦点を当てたコミュ

ニケーションの前に知識の伝授と練習活動を行うべきである」とする反対意見が存在し、指導者の間にも先行する文法指導なしに行われる活動への不安や抵抗感があるようである。本研究が究極的に目指したのは、活動中の学習者による言語使用の様態とその潜在的な意義を示すことで、言語発達のために必要な経験に関する一般的な認識を刷新し、第二言語の指導に新たな次元を開くことであった。

3. 研究の方法

研究の目的を達成するため、研究期間中に複数回のデータ収集とその分析、およびそれらの結果と先行諸研究の知見をふまえた理論構築に取り組んだ。まず、上記(1)および(2)の目的に照らして、日本語を母語とする英語学習者がペアで情報交換型のタスクを遂行する際のやり取りを学習者の同意のもとに録音して書き起こし、本研究用に準備した符号化スキームに沿ってその相互作用上の特徴を同定していった。課題は3つの異なる情報交換型タスクであり、特に3組の学習者たちのやり取りに特に焦点を当て、会話分析の手法でターンごとの分析を進めた。それと並行して数量的な比較も行うことで、異なるタスクに対するそれぞれのペアの取り組みの差異も分析している。指導介入の効果の検証を目指した研究ではないため、統制群を設定しての群間比較は行っていない。

目的(3)の達成のためには、学習者が異なる絵を用いた相違特定課題に継続的に取り組み、その都度発話の書き起こしを通して自身の言語使用を振り返る機会を与えられた場合、学習者にどのような気づきが生まれ、それが以降のパフォーマンスの変容にどのような関連を持つのかを明らかにするため、週1回のペースで計5回、14組の同じ学習者たちのペアから発話データを収集した。分析では、各回の振り返りの記述内容をそれに続く言語使用のデータを照らし合わせ、経時的な変化の状況を見極めようとした。

目的の(4)に関しては、課題ごとに確認された相互作用上の特徴をそれぞれに固有の特性と関連づけ、さらに過去のタスク分類やタスクの複雑さに関するモデルなどを参考にして、包括的なタスクの「見取り図」を作成していった。

4. 研究成果

学習者間の義務的な情報交換を要求するタスクの中で、最初の実験ではいわゆるジグソー型の「ストーリー復元」、双方向の情報伝達が必要になる「相違特定」、および基本的に一方方向の情報伝達課題である「描画複製」の3つを用い、上の「研究の方法」で述べたように3組の学習者たちがこれらの課題に取り組んだ際の言語使用を分析している。その結果、どの課題を用いた活動においても

共感的な反復、支援的な情報提供を含む発話の協働的な構築、表現形式の自発的修正、特定表現の強調的な使用といった相互作用上の特徴が観察され、学習者が共通の基盤を築こうとしながら主体的に情報の授受をしていることが明らかになった。同時に、発話内行為 (illocutionary force) や積極的な推論の発動、さらに多機能的 (multifunctional) な発話の事例が多く確認された。これらの面でタスク・ベースのやり取りは自然な自発的コミュニケーションを反映したものであると言える。特にこれまで指摘されることのなかった発話の多機能性は教材用に書かれたテキストの談話においてはほとんど見られない特徴であり、そこにタスクを用いた活動の意義と必要性を理解することができる。以上から、多様で豊かな言語発達のための契機を提供する装置としての情報交換型タスクの役割が明らかになった。

3つのタスクでは、学習者間のやり取りに重要な違いも見られた。すなわち、この研究で分析対象とした3組によるやり取りでは、

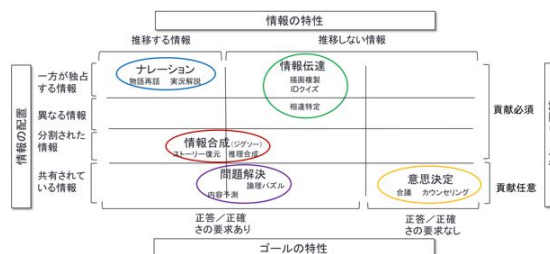
- 学習者の発話が帯びている機能は相違特定課題で最も多様であり、描画複製課題において最も限定的である
- 対話の相手の手にある情報の探査 (inquiry) は、相違特定課題においてほとんどがインプット提供的なものである一方、描画複製課題では情報探索的なものとなる
- 意味交渉の生起は描画複製課題で (描画という作業目標の達成のために) 顕著に多く、ストーリー復元課題では (おそらく学習者が自らの持つ情報を提供することに注力することから) 非常に少なくなる
- ストーリー復元課題では繋辞や動詞を伴う発話が他の2つのタスクより顕著に多く、またストーリー・ラインの確認のため、要約的 (summarative) で長い (prolonged) ターンがやり取りの中に現れる

これらの事実は、具体的な手順やゴールの異なる情報交換型のタスクそれぞれで学習者間の相互作用が特徴的な様相を呈し、それぞれが第二言語の発達を促すうえでの固有の潜在力を有することを示している。データの分析で対象を3組の学習者たちに限定したことで言語表出プロトコルの詳細な分析が可能になり、以上のような発見に至ることができた。

続いて行った研究では、情報交換型のタスクに取り組む学習者が自らの表出をどのように認識し、そのふり返りを通してどのような気づきに至り、そしてそれらの経験がいかに言語使用の変容を導くのかを確かめようとしている。そのために同じ学習者のペアに内容を変えた相違特定課題を継続的に与え、毎回の活動後に自由記述形式で自らのパフォーマンスに関する内省を求めた。得られた

データの分析から明らかになったのは、学習者の発達が決して一様なものではなく、内省的記述との関連にも個人差があるということである。この結果は、第二言語の発達を単純な因果関係や個別要因への還元によっては捉えきれない複雑で非線的なプロセスであるとする近年の研究分野における認識を裏づけるものである。自らの言語使用をふり返る機会が以降の表出の質に具体的にどのような影響を与えるのかについての分析は、そうした複雑な発達の様相を捉えるのに適した分析手法の検討とともに今後も継続して行っていきたい。

ここまでの研究を通して、情報交換型タスクのうちでも個別の課題ごとに相互作用上の特徴の現れ方に違いがあり、それらの一部分を各課題固有の特性に帰することが可能であると思われたことから、さらに多様な課題についてもそれらの性格を入念に検討することで実践上のさまざまな目的に即してタスクを用いていくための参照枠を導くことができそうだとの見通しが得られた。そこでタスクのタイプや特性に関する先行研究を精査し、本研究で扱ったものを含む代表的なタスクをそれぞれに固有の特性という観点から整理してみたところ、下図のようなマトリックスを描くことができた。



図中の円によって示されているタスクの5つのタイプは、タスクのマテリアルおよび遂行条件に関するいくつかの変数操作の効果という観点からも合理的に根拠づけることができる。さらに課題遂行の難しさを左右する要因としての変数 (variables) について、タスクのタイプそれぞれでマテリアルの操作に関するものと遂行条件の操作に関するものに分けて視覚的にもわかりやすくまとめ、英語教員向けの研修やワークショップなどで示し、コミュニケーション課題の準備と活動の計画における参照枠とすることを呼びかけた。このような統合的フレームワークの提案に至ったことは、本研究から生み出された、当初の想定を超える成果だったと言える。

研究期間中に依頼されたシンポジウムへの登壇や講演の依頼にはできる限り応じるようにし、研究の結果を広く開示するように努めた。全8章のうち3つの章 (第一章「タスク・ベースの発想と言語教育の方法論」、

第五章「教材の準備と活用」、第九章「言語・言語発達・言語使用の考え方と言語教育」)を執筆し、全体の編集も担った共著書の中にも今回の研究から得られた知見およびそこから導かれた示唆を盛り込み、言語指導の新しいあり方についての提言を行っている。

成果公開のさまざまな場で述べてきたことの中には、言語発達の駆動力としての課題の潜在的な力とその性格についての理解を深めることの重要性や、学習者が行為の中で探索的に言語的な意味を見出すことを具現した課題を用いることの意義などが含まれる。そうした場ではまた、言語形式の指導から練習活動を経てコミュニケーションへと至る授業展開で論理的帰結として学習者に当初より表出における正確さを要求していくことの問題や、そこに内包されている累進的で線的な発達・学習観に対する疑義、さらにインプットとアウトプット、基礎と応用、知識とその活用といった二項対立的な思想を基礎として言語教育を考えることに潜む危険性などを指摘している。現在の第二言語習得研究で主流となっている情報処理 (information-processing) モデルに対して、探索的な身体性認知 (embodied cognition) をも視野に入れ、言語発達の複雑でダイナミックな性格に配慮した言語指導のビジョンを描くことの必要性も折にふれて強調してきた。そうした提言の機会を多く持つことができたことでは、研究成果の一定の社会還元を果たすことができたと考えている。本研究から生まれた新たな問題意識は将来的な研究の構想へとつながり、またすでに着手している言語指導用教材書籍 (共著) の制作にも活かされている。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計2件)

1. 松村昌紀 (2017). 「タスク・タイプの理論的基盤と学習者の言語使用」 『中部地区英語教育学会紀要』 第46号, 55-62. (査読あり)
2. 松村昌紀 (2015). 「第二言語の指導におけるタスク基盤型相互作用の役割」 『中部地区英語教育学会紀要』 第44号, 197-204. (査読あり)

[学会発表] (計12件)

1. 松村昌紀 (2018). 『コミュニケーション課題の準備と活動の計画における留意点』 2018年度 LET 関西支部春季研究大会ワークショップ, 2018年5月26日, 千里ライフ・サイエンス・センター, 豊中市.
2. 松村昌紀 (2018). 『言語教育における探索・経験・創発』 2018年度 LET 関西支部春季研究大会シンポジウム, 2018年5

月26日, 千里ライフ・サイエンス・センター, 豊中市.

3. 松村昌紀 (2017). 『言語教育にとってのタスク、言語教師にとってのチャレンジ』 第43回 KELES セミナー (招待講演), 2017年12月23日, 龍谷大学大阪梅田キャンパス, 大阪市.
4. 松村昌紀 (2017). 『英語授業における経験の創出と組織化』 2017年度一般社団法人大学英語教育学会中部支部講演会 (招待講演), 2017年12月9日, 中京大学, 名古屋.
5. Matsumura, M. (2017). *Tasks for language learning and teaching*. The 2017 Tottori ALT Skill Development Conference (招待講演), 2017年12月1日, 倉吉未来中心, 倉吉市.
6. 松村昌紀 (2017). 『タスク・ベースの英語教育 位相・構成・転回』 日英・英語教育学会第18回研究会 (招待講演), 2017年5月27日, 広島大学, 東広島市.
7. 松村昌紀 (2016). 『タスク変数の役割を考慮したタスク・タイプの構成』 第43回中部地区英語教育学会三重大会, 2016年6月26日, 鈴鹿医療科学大学白子キャンパス, 鈴鹿市.
8. Matsumura, M. (2016). *Rethinking task variables, or getting rid of obsession for language: a critical review of the cognition hypothesis, the triadic componential framework, and the SSARC Model*. International Conference of Applied Linguistics & Language Teaching (国際学会), 2016年4月16日, 国立台湾科技大学, 台北市.
9. 松村昌紀 (2015). 『学習者による対話的 second language 使用のタスク遂行時間内における変化』 全国英語教育学会第41回熊本研究大会, 2015年8月22日, 熊本大学, 熊本市.
10. Matsumura, M. (2015). *Identifying the momenta for second language development in task-based peer interaction*. TBLT 2015 (国際学会), 2015年9月17日, KU Leuven, Leuven.
11. 松村昌紀 (2014). 『英語教育のコンテキストとタスク活用のための意思決定』 英語授業研究会関東支部 (招待講演), 2014年11月13日, 昭和女子大学, 東京都.
12. 松村昌紀 (2014). 「教室における自由で自然な言語使用の役割とその実現の条件」 第41回中部地区英語教育学会山梨大会シンポジウム, 2014年6月21日, 山梨大学, 甲府市.

[図書] (計1件)

1. 浦野研・川村一代・田村祐・福田純也・松村昌紀 (2017). 『タスク・ベースの言語指導 TBLT の理解と実践』 大修館書

店 (松村昌紀編, 全 250 頁).

6 . 研究組織

(1)研究代表者

松村 昌紀 (MATSUMURA Masanori)
名城大学・理工学部・教授
研究者番号 : 60275112